

釧路市立朝陽小学校

(開校 昭和三十四年一月一日)

釧路市の人口は昭和三十二年頃から急激に増加し、住宅地は市東部の春採地区への伸張をみる。炭鉱住宅と共に道々昆布森線に沿って望洋団地の造成が行われ、道営住宅、市営住宅が建てられて、昭和三十五年には春採地区の住宅数は市全体の約十六パーセントを占めた。

この時期、桜が丘小学校では児童数の増加で二部授業を行わざるをえなくなり、昭和三十一年から朝陽小学校開校までそれが続いたのである。このように、朝陽小学校は、炭鉱住宅の拡張と市東部の都市化による桜が丘小学校の収容児童数の限界をみて、誕生したのである。

昭和三十三年一月 四日 市教委、新設校を朝陽小学校と命名

三十四年 一月 一日 校長に高野忠夫氏、教頭村田弘三氏外六

名の教諭、発令

一月二三日 開校式、桜が丘小学校より三三〇名、湖

畔小学校より二名、計三三二名。五年以

下七学級

高野校長は「開校のようす」を次のように述べている。

一月二十三日の開校式は晴天無風を祈っておりましたが、そのかいなく相当の吹雪となったので、桜が丘小学校から移ってくる子どもたちの気持ちを心配していました。時間がたつて、もうじき着きます、との連絡を受けて全職員、父母の方々と玄関前の雪の上に並んで迎えたところへ、五年生が先頭になって雪煙を立てて走るように、その後小さい一年生が赤いホッペタに汗を流しながら雪を踏んで現れたのを見て、自分の教育は子どもをたくましく育てることだ、と心に決めたのでした。

(「生い立ちの一〇年」八ページ)

三十四年 二月二〇日 校章制定

三月二四日 修業式(廊下で)、卒業生なし。

五月 四日 ピアノ披露音楽会(講師瀬戸山雪子氏)

三十五年 三月二〇日 第一回卒業式(桜ヶ岡会館)

三八年一月三〇日 校歌制定、発表会

四一年 四月 六日 校区変更、新設の白樺台小学校へ二二二

名転出する。

校章とその意味、経緯

昭和三十四年二月二十日制定

デザイン 阿部孝策教諭

《校章の持つ意味》

- 一 中央には校名にふさわしい朝の太陽を示す
- 二 三方に太陽の光芒を安定した形に配す
- 三 桜の花びらは、本校が桜ヶ岡四三番地



にあるという意味と桜が丘小学校から分離したことを含む。

四 外の輪は、「釧」即ち釧路市の「釧」であり、輪(腕章などの)

である。また、和を表す。

(平成十年年度学校要覧)

このデザインを担当した阿部孝策先生(元愛国小学校長)は校章作成の経緯を『回想』の中で次のように述べている。

『阿部君、校章を考えてくれ』。開校まもなく高野校長からそう言われた。桜が丘小学校より分離校でその姉妹校を意味することが条件であった。門外漢の私にとっては大変なことであったが、何枚も下絵を描き、やっと職員会議で決定した。

未来に向けて力強く伸びゆく子どもたち、その姿を象徴するため外郭に光芒を配したが、当時市内に同じような光芒の校章があったため苦勞した。光芒の先端を鋭角にして力強い意志を表現しようとしたが、危険防止を考え多少丸みをもたせたのがかえって柔らかさと暖かさを感じさせたように思う。また、光芒の間に桜の花びらを配して桜ヶ岡の地名と桜が丘小学校の姉妹校を表し、釧路市とみんなの和を表現す

るために桜の外部に腕輪の古語である「釧」を配した。とに角、校章をデザインする機会など希少であるだけに、昨日まで勤務していたと錯覚を起こすほど私にとって生涯忘れられることの出来ない学校である」

(二〇周年記念誌「八ページ」)

✿ 校歌とエピソード

校歌は昭和三十八年十一月三十日に制定され、発表会が開かれた。

本校二代校長**田中 武桜**作詞、**飯田 三郎**作曲によるものである。

飯田氏は根室市出身、キングレコード専属で、国民歌「若い日本」の作曲者である。校歌発表会は当日、本校屋体で開催し、釧路教育局の橋本道博指導主事の歌唱指導が行われた。

校歌制定について、当時在職の工藤幸一朗先生(元清明小学校長)は思い出を次のように書いている。

「校歌制定委員会が発足したのは昭和三十八年の春、歌詞の公募に踏み切って四十九点の応募がありました。審査会を三回もち、最後は投票で決めましたが、当選した歌詞は田中武桜先生のものでした。『校長先生も応募されていたのですか』と大笑いのうちに審査会を閉じ、かねて依頼の飯田三郎先生に作曲をお願いしたわけです」

(「生い立ちの一〇年」一一ページ)

釧路市内の学校で、校歌の作成にあたり公募の形をとったのは本校が初めてであろう。四十九点の応募があったということでもかなりの関心を集めたであろうことが想像される。それだけに、制定委員会の議論はかなり白熱したものになったことであろうし、決定するまで相当の時間と労力を要したと思う。

ところで、当選作は田中校長作詞の佳品である。

改めて、歌詞を読ませていただいたが、詩情豊かで温かい教育観に基づいた語句が散りばめられていて、さすがという感じである。

田中校長は本校三十年周年記念誌に『教育の道しるべをみつめて』と題して、校歌について解説している。

「三十年の歴史を讀う学び舎に 今日も希望の朝の陽のぼる」

学校教育を速く校章、校旗、校歌の三本の柱に言及すれば、校章は初代校長、校旗、校歌は二代校長の制定になり、何れも意義深く教育への指針道標として評価も高い。校歌は小生の作詞であり、当時を追想し解説を進めてみたい。育つ心、育てる心のために。

なだらかにうねり鮮やかな緑に敷きつめられた丘の上を風は音もなく濁りなく清らかに吹き渡り淡紅に咲き匂う山桜の花のかぎりの何と優雅にして清廉であろう。この地上を敬いて果てしもなく広々と澄み渡った空の彼方から静かにさし昇る朝の陽を浴びて森羅万象あげて生気に甦るときこの自然の美しさ大らかさにつつまれた丘の学校私達朝陽の子等の明るい希望に満ち溢れすがすがしくすんだ円の瞳は学窓の内外にその微笑をなげかけている。

この陽射し明るい校舎の窓を越えて丘の向こうに見える太平洋のあの限りのない海原の果てから浦の汀々に打ち寄せる波のしぶきと潮の香りを浴び恵まれた四囲の環境の中で強く健やかに私達の体を鍛えるとき明日の使命を担って立つ私達朝陽の子等の逞しい力がその腕にみながぎってくる。

年移り人は代われどこの学び舎の庭に集う教え子の私達はやさしい自愛の導きとその諭しのもとに育まれ誠の道をめざした一筋に互いに心をつなぎ手を取りあって切磋琢磨しあいながら共に伸びてゆく私達朝陽の子等は清く豊かな心を心としていつまでもたゆみなく育っていかう」

(「三十年誌」二二ページ)

参考資料 「生い立ちの一〇年」 (昭和四十三年十一月)

開校二〇周年記念誌「朝陽小」 (昭和五十三年十月)

